騎馬鷹狩文化の起源を求めて

～アルタイ山脈に暮らすカザフ遊牧民と鷹匠の民族誌～

相馬　拓也

博士（農学）
早稲田大学高等研究所 助教（2016 年度～）
特定 NPO 法人 ヒマラヤ保全協会 理事

I 鷹狩文化の成立を支える遊牧世界

鷹狩は人間の営みだけで、文化そのものを保存できる「無形文化遺産」ではない。鷹狩は本来、古代の遊牧民が生活のなかで編み出した技法であり、家畜を育て、季節移動を行い、騎馬での出猟が途絶えなかった季節移動型牧畜活動（以下、遊牧）の暮らしと生産活動に依存することで、必要不可欠な成立条件が満たされた［Soma 2015］。現在でもそうした遊牧民の暮らしと密接な関係を保つ「騎馬鷹狩」の習慣は、モンゴル西部バヤン・ウルギー県（Баян-Өлгий Аймаг）のアルタイ系カザフ人 Алтай Казак に受け継がれている（図 1a-c）（図 2）。「イヌワシの馴致」「騎馬による出猟」「右手での据え置き」などの特徴は、古代の鷹狩との直接の系譜を示唆する［Soma 2012a、2013a；相馬 2012a, 2013a］。ただし、現在のいわゆる鷹匠「ブルクッチュ（Бүркітші）」は同県で 90 名に満たない。そしてモンゴル西部の騎馬鷹狩文化も、近年の急激な観光化と文化変容のただなかで、本来の文脈を失いつつある［Soma 2012c, 2012d, 2013b; 相馬 2012b, 2013b］。

II イヌワシの馴化についての技法

アルタイ系カザフの鷲使いは、メスのイヌワシのみを鷹狩用に馴化する。イヌワシは「ブルクット（Бүркіт）」と呼ばれる。一方、オスのイヌワシは「ブルクット」とは呼ばれず、蔑みの意味を込めて「サルチャ（Сарша）」と呼ばれる。カザフの鷲使いの間では、ワシの種類、性格、年齢、体尺によって、馴化の仕方には個別の知と技法が育まれた［S-02、S-12、S-15、U-01］。カザフの古い諺では「10 のワシには 10 の異なる飛び方がある（10 бүркіт туралы 10 ушады）」と、イヌワシそれぞ

a U-01 氏 でもっとも熟練の最古老のひとり

b S-16 氏 サグサイで生活を共にした若き鷹匠

c Ts-06 氏 メディアでも紹介された少女の鷹匠

図 1 アルタイ系カザフ人の鷲使い

れの多様な個性は表現されている［U-01］。鷲使いによる「イヌワシの馴化／ラポール構築＝ウズゲ・ユレトゥ（өзге уйрету）」には、おおきく分けて(1) 巣から捕えたヒナワシ「コルバラ（колбала）」の馴化と、(2) 罠などで捕えた成鳥「ジュズ（жүз）」の馴化、の 2 種類の方法がある。鷲使いたちは、素晴らしい能力を持ったワシを「クラン（кыран）」と、愛着を持って呼びあらわす。「クラン」とは、カザフ鷹狩文化でイヌワシを称えた最高の表現として用いられる。

一般的にジュズは約 45 日間、腕の良い鷹匠なら約 30 日間で馴らせるといわれる［S-05］。捕獲した個体の個性や体尺に適った「適正量のエサを与えること＝バプ・ケルセ（бабы келсе）」が、なによりも重要とされる。具体的な手順は図 3 に示した#1～#9 のプロセスにしたがって進められる。鷲使いたちはみな、「イヌワシを馴化するのは、人間の子どもを育てるのと同じ」と考えている［A-01、A-03、Ts-01］。イヌワシの馴化には、行動規制や食餌制限などの厳しい施しもあるが、両者の間には主従関係よりも、「友」としてのラポール構築が行われるべきとの古い教訓がある。

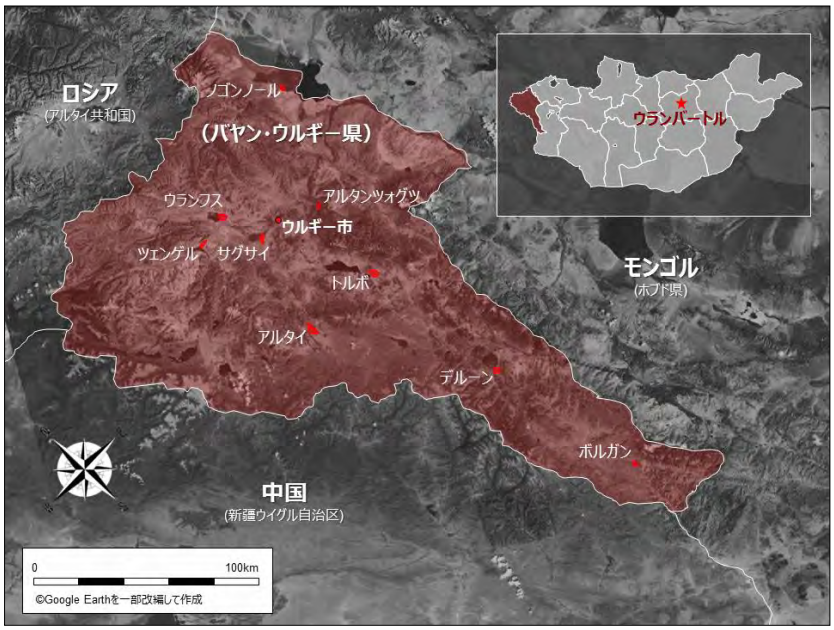


図 5 イヌワシへの給餌適正動物図 2 バヤン・ウ

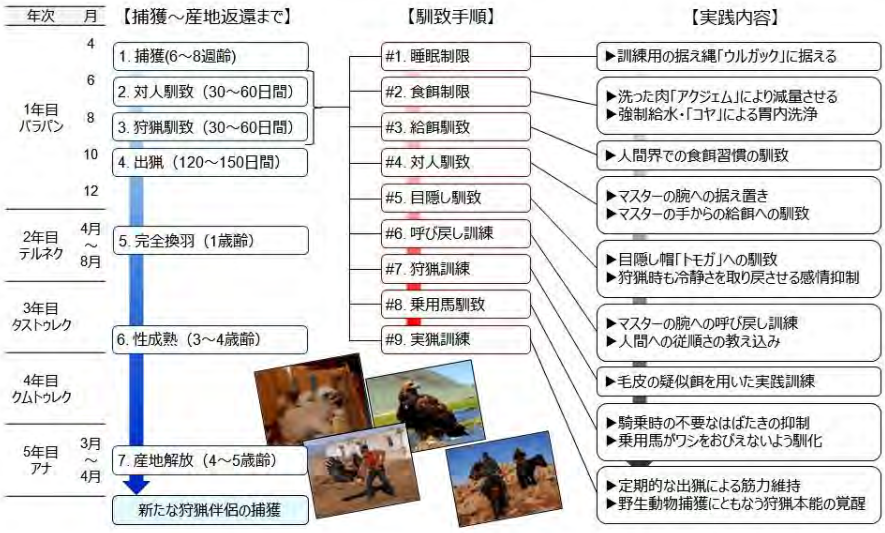


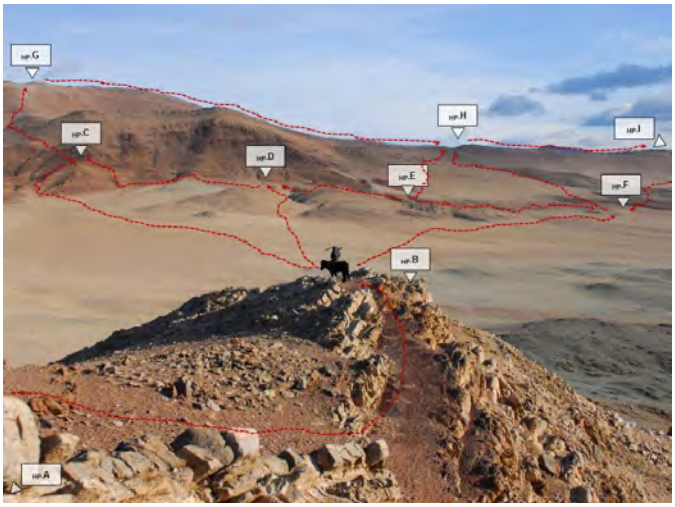
図 3 イヌワシへの給餌適正動物

III 騎馬習慣の必要性と出猟

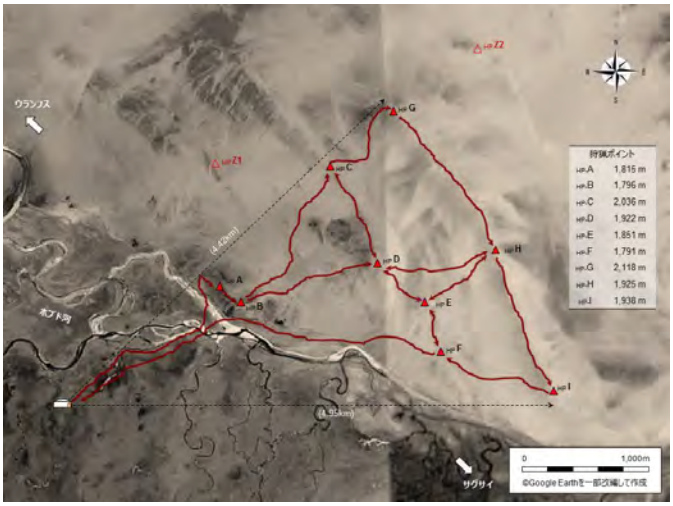
アルタイ山脈のカザフ人コミュニティでは、牧畜社会にともなって騎馬習慣が絶えなかったことも、騎馬鷹狩文化を存続する成因となっている。キルギス共和国（イシク・クル湖周辺）の騎馬鷹狩猟が衰退した背景には、伝統的牧畜活動の変容とともに乗用馬所有率の急激な低下にも一因がある［相馬 2008］。牧畜コミュニティでは乗用馬／狩猟馬の維持が比較的容易であり、都市部・定住地で維持するための干草、濃厚飼料の供給が最小限で済む。

騎馬習慣と乗用馬の必要性を示す一例として、サグサイ村のアグジャル山地での狩猟活動が挙げられる［相馬 2013a；Soma 2014］。同狩場では、獲物を探索するための狩猟ポイントが 9 地点確認された（$_{HP}$A～$_{HP}$I）（図 4a）。自宅から $_{HP}$A⇒$_{HP}$G（もしくは $_{HP}$H）の狩猟ルートは、走行距離で約 6。4～7。8km となり、片道平均 4～5 時間前後が費やされた。普段使用される「標準ルート」（$_{HP}$A⇒$_{HP}$I 間往復）の最大走行距離は約 20km となる。$_{HP}$A⇒$_{HP}$G 間往復の累積標高は約±390m、また $_{HP}$A⇒$_{HP}$I のすべてを回ると約±450m に達する。滞在先の鷹匠 S-16 宅からもっとも遠い $_{HP}$I は、走行距離で 5。7km（直線距離 4。5 km）程度の位置にある。狩場でのキツネとの遭遇率は低く、頻繁な探索騎行が成果を左右するため欠かせない。イヌワシを腕に据えてこうした長距離登山は難しく、身体的負荷を考えると騎行以外で出猟が成立することはない。また騎馬鷹狩猟はキツネの生息数が少ない草原や平原で行われることはほとんどなく、岩山の騎馬登山が騎行主要路とされる（図 4b）。これは峰の尾根線などの見晴らしの良いところから眺望し、キツネや獲物を探すためである。

高コストな乗用馬の所有・維持管理への負担が少ないこと



a アグジャル山地全景



b 狩猟ルート

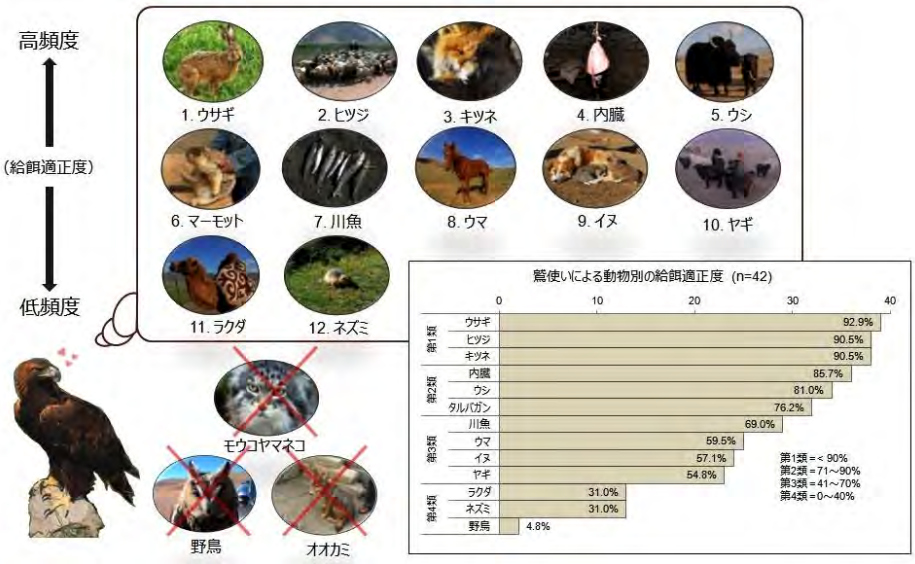
図 4 狩場アグジャル山地

に加え、日常生活に騎馬習慣が継続されたことが、アルタイ地域で騎馬鷹狩猟が生活技法としての役割を失わなかった理由と考えられる。

IV 給餌動物の適正と消費量

4.1. 動物別の給餌適性

イヌワシには生来の食餌嗜好許容範囲（diet palatability）の広さがあり、さまざまな肉の種類に許容性を示す。ただし、ブルクッチュにもっとも好まれる獣肉は、狩猟により得た野性動物「アン（aн）」の肉と言われる。構成的インタビューにより得た結果から、給餌に好ましい動物別適正度を第1類～第4類に分類された（第1類 =< 90%／第2類 = 70～90%／第3類 = 40～70%／第4類 = 40%<）（図5）。



4.2. イヌワシへの給餌頻度と分量

イヌワシの馴化では、給餌用食肉の確保がもっとも重要かつ困難な問題となる。サグサイ村で生活をともにした若い鷲使いの給餌頻度と分量（1 回の給餌量 300～500g）の観察結果から、年間食肉給餌量は 136.kg～181.5kg の間と見積もられた［Soma 2015a, 2015b］。この分量は、現地のヒツジ換算（1 頭の枝肉 20～25kg）で 7～8 頭分と推定される。また参与構成的インタビューでは夏季トゥレク期は、対象者の 61.5%(n =24)のが毎日給餌しており、1 回の平均給餌量 (Mean±S.E.) は 1137.5±130.5(g)であった（以下、給餌日数：夏季 150 日間、冬季 210 日間で算出した）。全体の 28.2%(n =11)が 2～3 日毎（2 日毎 n =4/ 2～3 日毎 n =5/ 3 日毎 n =2）の給餌をしており、毎回の平均給餌分量はそれぞれ 1437.5±223.2(g)/ 1150.0±176.8(g)/ 1750.0±230.2(g)と算出された（図 6a-b）。通年では、夏期の平均 144.5±15.2(kg)、冬期の平均 111.5±13.5(kg)となり、冬季は夏期にくらべて、給餌分量が 22.9%ほど減少していることがわかる。イヌワシ 1 羽分の年間食肉消費量 (Mean±S.E.)は平均 241.3±18.3(kg)と算出された。この消費数は、現地の在来ヒツジ換算で 9.6～12.0 頭分に相当する。

観察とインタビューいずれの結果から、鷹匠世帯では毎年大量の食肉をイヌワシのために確保する必要があり、平均すると通年でヒツジ・ヤギ 7～12 頭分の負担が明らかとなった。

V イヌワシ飼養と家畜再生産

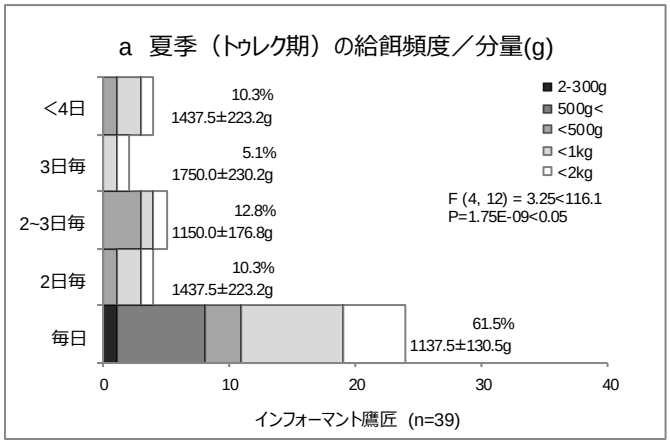
イヌワシへ与える大量の食肉を確保するためには、牧畜活動における安定した幼畜の出生が不可欠である。イヌワシ1 羽を健全に保持し、かつ平均的な社会生活を営むための家畜所有数(total livestock possession: TLP)を以下に算出した［Soma, Buerkert, and Schlecht 2014］。

調査対象コミュニティの牧畜世帯（$_{HHs}$）は、TLPに応じておおきく次の3つに分類することができる（Lg > 201頭, Mg = 101～200頭, Sg < 100頭）。ヒツジ・ヤギの10頭毎の出生率はLg: 4.72頭、Mg: 4.49頭、Sg: 4.93頭と算出された。世帯ごとの平均出生数（実数）はLg: 78.3頭、Mg: 47.5頭、Sg: 15.2頭となった。現地では家畜所有数（成畜）100～150頭に対し、約40～45頭の幼畜出生数が見込まれると考えられる。牧畜コミュニティでは一般的に、毎月2頭程度のヒツジ・ヤギの消費が望ましいとされる。世帯毎の年間食肉消費量はLg: 21.7頭、Mg: 18.0頭、Sg: 13.0頭、全体では平均15.6頭と算出された。とくにSg世帯は年間出生数の86.0%を消費していた。マルチンの年間食肉消費量を24.0頭とし、イヌワシの消費数9.6～12.0頭分を加えると、鷹匠世帯でのは33.0～36.0頭前後が必要と考えられる。この消費数に見合う幼畜の再生産が期待されるTLPは、ヒツジ・ヤギ（成畜）約100頭以上/ $_{HHs}$の所有が必要とされる。イヌワシ1羽は平均的な世帯（Mg）の約半年分の食肉を消費している。これは、貧困世帯（Sg）の年間消費分と同じくらいの分量が必要とされることとなる。そのため、牧畜社会以外でイヌワシを保持しようとした際に、食肉の確保はきわめておおきな経済的負担となる。そのため冬季の出猟とは、「獣肉の確保」の意味がある。とくに家畜の再生産が期待できない鷹匠にとって、イヌワシを所有することには恒常的な出猟習慣の実践と継続が必要とされる。いわば現代の文脈では、「イヌワシを駆る」ことは、「イヌワシによって狩らされている」という皮肉な逆説(paradox)も成立する。騎馬鷹狩文化の成立には、家畜を飼養する遊牧社会の継続と安定した牧畜生産性が、不可欠な生態条件となっている。

VI 鷹狩実践と伝統知継承の社会条件

アルタイ系カザフ人のコミュニティでは、鷹狩を始めるための法規制や社会的制約は一切なかった。イヌワシは、カザフ人ならば誰でも飼養できる権利でもあり、むしろ騎馬鷹狩への参入は若いカザフ人たちにとって、成人男性へのイニシエーションとみなされた。イヌワシの所有と鷹狩への新規参入者を制限しなかったことが、世代を越えて鷹狩を今日に存続させた要因といえる。

モンゴル西部では、イヌワシ馴化の知識や技法（TAK）やイヌワシや狩場についての伝統知（TEK）は、鷹匠だけが保持する「秘儀」ではなく、「社会的共有知」として、鷹匠の家族や親戚、コミュニティ内でも広く共有されている。鷹狩技術の継承は、その大部分が父から子への「垂直継承」である。しかしバヤン・ウルギーの鷹匠たち（n=47）の継承関係を調べたところ、74.0%（n=35）が父親からの技術伝承、26.0%（n=12）が自らの技術学習という結果となった。現在は鷹匠の 1/4 程度が鷹匠家系以外からの参入者であった。たとえば、サグサイ村で鷹匠家系（父が鷹匠）に属していないブルクッチュは4名のみであった。しかし滞在先の若き鷹匠 Jenisbek 氏の場合は、熟練の Mana 氏（65 歳）とは親戚関係にあるほか、伯父の Elik 氏（51 歳）がその技術の手ほどきをしている。また同冬営地には、Baimandai 氏 （74 歳）、Baitei 氏（73 歳）の 2 人の熟練のブルクッチュがおり、継承関係はコミュニティ内でも共有されている。親族や近隣の鷹匠同士による「水平継承」の関係が容易に成立する。こうした鷹狩の技術共有は現代



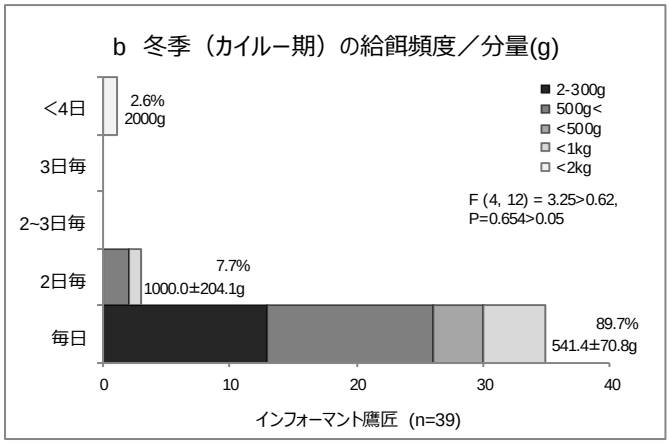


図 6 イヌワシへの給餌頻度／分量

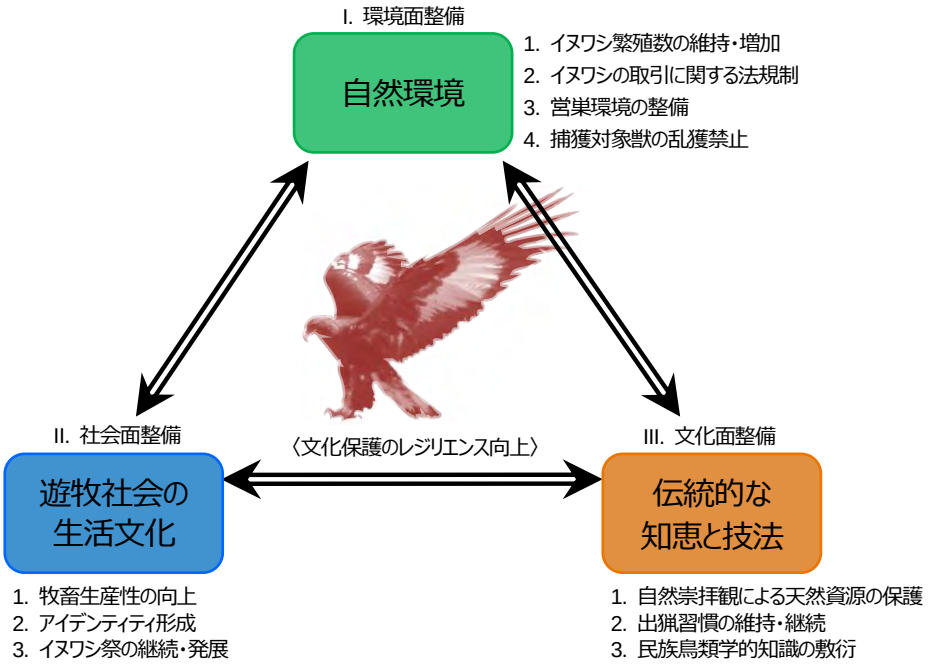


図 7 騎馬鷹狩文化の文化保護のための成因関係図

にはじまったことではない。トルボ村の最古老の鷹匠 Baitola 氏（95 歳）は鷹匠の家系ではない。鷹狩を学びはじめた 1930 年代からイヌワシを自ら飼養しはじめた。はじめは、出猟時に勢子として参加するなどして近隣の鷹匠と交流し、鷹狩の技術を学ぶことができた。イヌワシ飼養への新規参入の制約がなかったことに加え、鷹狩の技術そのものが社会で共有されたことにより、「水平継承」を促進し、鷹狩文化の社会的浸透圧を高める結果となった。

VII まとめ：騎馬鷹狩文化の成立条件とレジリエンス

騎馬鷹狩文化は通常の無形文化遺産と異なり、自然との調和によって成り立っている。前述のように、人的行為と伝統意識のみが、鷹狩文化を存続させる唯一の推進力とはならない。そのため以下の 3 つの条件（C_1 ～ C_3）；(C_1) 自然環境：イヌワシの営巣環境の保全、(C_2) 牧畜社会：牧畜生産性の向上、(C_3) イヌワシ馴致の伝統知：出猟習慣の継続、が調和しなければならない（図 7）。

(C_1) 生態環境面（イヌワシの営巣環境の保全）：騎馬鷹狩では、飼養するためのイヌワシそのものがいなくては成立しない。そのため、イヌワシの繁殖と営巣環境の整備は絶対条件である。イヌワシの生物学的な調査研究（個体数、繁殖率、営巣地など）はまったく行われていないため、同地域での継続的な調査研究と個体数把握が必要である。また行き過ぎたイヌワシの取引(eagle traffic)や、捕獲を制限する法整備の必要もある。

(C_2) 社会面（牧畜生産性の向上）：1 羽のイヌワシに費やす年間の給餌食肉量は、ヒツジ換算で 7～12 頭にも上る。このため、それぞれの鷹匠世帯が意識して牧畜生産性を高めることは、騎馬鷹狩文化の保全の必要条件でもある。また牧畜生産力を高めることによる、生活上の経済的・心理的負担の軽減も必要と考えられる。牧畜による狩猟馬の育成と増加も、後述の出猟習慣を容易にする条件となる。

(C_3) 文化面（出猟習慣の継続）：イヌワシ馴致と飼養の根本を変容させている原因は、出猟習慣の減少と考えられる。本来イヌワシの馴化は、捕獲高を上げるための日々のトレーニング、闘争本能を呼び覚ますための冬季の食餌制限、パフォーマンス向上のための健康管理、などのための知識と技法を培ってきた。つまり出猟習慣の減少とは、狩猟での生産性と技術力の向上を意図したTEKの消失に等しい。またイヌワシへ野生動物の獣肉を与えるためにも、出猟を継続させなければならない。

鷹狩文化が人類にもたらした貢献とは、猛禽類の馴化を通じて自然と動物を理解するための、特殊な知恵と技術を育む機会を授けてくれたことでもある。人間の行為のみで成立することのない鷹狩と鷹匠の知恵と技法 TEK とは、まさに人間と動物の不断のかかわりから生み出された「ヒトと動物の調和遺産(human and animal harmonious heritage)」と定義することができる。

＜著者略歴＞ Takuya Soma (Такя Сома)

東京都生まれ．博士（農学），ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院（SOAS）修士課程修了，早稲田大学 大学院文学研究科博士後期課程 満期退学．カッセル大学エコロジー農学部 Watercope Project 客員研究員を経てモンゴル西部バヤン・ウルギー県、ホブド県で長期フィールドワークに従事。モンゴル西部アルタイ山脈および中央アジアの牧畜社会を中心とした人文地理学 Хүний газар зүй，生態人類学 Ecological Anthropology，動物行動学 Animal ethology，民族鳥類学 Ethno-O-nithology，ヒトと動物の関係誌 Human and Animal Interactions: HAI を専門とする．

主著：*Human and Raptor Interactions in the Context of a Nomadic Society: Anthropological and Ethno-Ornithological Studies of Altaic Kazakh Falconry and its Cultural Sustainability in Western Mongolia*. University of Kassel. また近年の社会活動に、NHK 総合『地球イチバン 地球最後のイーグルハンター』（2015 年 1 月 30 日放送）への制作協力がある。